

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月17日現在

機関番号：17701

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2012

課題番号：22320018

研究課題名（和文） 戦争死者慰霊の関与と継承に関する国際比較研究

研究課題名（英文） International Comparative Study on the Involvement in and Succession of Commemoration for the War Dead

研究代表者

西村 明(NISHIMURA AKIRA)

鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：00381145

研究成果の概要（和文）：本研究では、日本における戦争死者慰霊の第三者関与と世代間継承の問題を、海外の事例も踏まえながら比較検討した。新たな慰霊活動や慰霊巡拝の創出・開拓といった契機や、時間的推移における慰霊活動の維持等において、死者との直接的関係を持たない宗教的・世俗的エージェントの果たす役割の重要性が確認された。同時に世代間継承における意味変容のあり方がその後の展開に大きく作用することも実証的に明らかとなった。

研究成果の概要（英文）：This project focused two aspects of actor in the commemoration for the war dead in Japan with comparing to the overseas cases: The involvement of third parties which consists of both religious and secular agents; Its succession by next generations. We could exemplify the significance of those agents at the moments of the creation and the maintenance of commemorative rituals and pilgrimages. In addition, we illustrated the way that the meaning of the events transformed for the participants would profoundly influence to the subsequent situation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	2,900,000	870,000	3,770,000
2011年度	3,700,000	1,110,000	4,810,000
2012年度	3,000,000	900,000	3,900,000
年度			
年度			
総計	9,600,000	2,880,000	12,480,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・宗教学

キーワード：慰霊、第三者、世代間継承、国際比較、宗教的エージェント、世俗的エージェント、意味変容

1. 研究開始当初の背景

これまでの戦争死者慰霊に関する研究動向は、社会問題となった靖国神社や忠魂碑等のあり方をめぐる議論の延長上において、その問題点を実証的に解明すべく関連事象の事実の掘り起こしと資料化に重点が置かれてきた。その結果、「戦後」「民間人犠牲者」「旧戦地」「第三者の関与」「次世代への継承」といった問題群が十分視野に入れられてこ

なかった。さらには、海外の研究動向の紹介や海外研究者との交流も徐々に進んできてはいるもの、相互に研究を参照して生かすというところにまでは及んでいない。

研究代表者の西村は、博士論文の研究として、長崎の原爆慰霊を事例として戦後における戦争死者慰霊の特徴を歴史的系譜関係の中に位置づけた。さらに、慰霊がもつ鎮静化機能（シズメ）と社会的参加への活性化機能

(フルイ)の両側面に注目し、慰霊行為の動態的な把握を行った。(西村『戦後日本と戦争死者慰霊』)そこでは今後の展望として、「体験者と非体験者のあいだに構築される共同性をめぐる問い」を挙げたが、言い換えればこれは慰霊の現場において、死者の最期を目撃した者と、その最期を看取れなかった身内・知人とが、ともに集うことによって何が果たされようとしているのかについて後進世代の視点から考える慰霊への関与と継承のあり方をめぐる今日的問いであり、かつしばしば「地獄の体験」という宗教的表現で捉えられる戦争体験を、宗教体験をめぐる共同性構築とのアナロジーで捉えようとする宗教学的問いでもある。この問いを受け、その後旧戦地における慰霊(遺骨収集・慰霊巡拝)に関心を移し、問題志向的アプローチで冒頭の問題群を視野に入れようと努めてきた。同時に、当該分野の国内外の研究者との研究交流に積極的に取り組んできた。

他方で、本研究の数名の研究分担者(森・村上・土居・清水)は、故・孝本貢氏を研究代表者とする「戦争の記憶の創出と変容—地域社会における戦争死者慰霊祭祀の変遷と現状」(基盤研究(B・一般)H19-21)に研究分担者として参加し、西村と粟津も研究報告や調査等に協力したという経緯がある。

2. 研究の目的

本研究の目的は、戦争死者慰霊における関与と継承の問題を、歴史と地域の視点から国内外の事例の比較検討を通じて明らかにすることである。それによって、従来の研究で十分扱われることがなかった、「戦後」「民間人犠牲者」「旧戦地」「第三者の関与」「次世代への継承」といった問題群を視野に入れることが可能となる。また、歴史の視点の導入から見ることで、現在の慰霊の在り方を規定し、構成するいくつかのパターンを抽出することが可能となり、他方、地域の視点から同時代的なサードパーティーの関与を見ることによって、慰霊の持続と変化をもたらす要因についてより明確な理解が可能となる。

3. 研究の方法

下記のように、「A戦争死者慰霊の世代間継承の歴史的展開とBサードパーティーの慰霊関与」と、「当事者との関係構築の技法」という2つのサブテーマ、「国内」「境界域」「海外の旧戦地」という3つの調査対象エリアからなるマトリクス上に各自の研究を位置づけた。まずは研究担当者がAとBについてそれぞれの視点と調査対象エリアから調査研究を行なうこととした。その際、マトリクス上の不足地域を補完する形で海外の研究協力者に研究発表を依頼する等、プロジェクトへのコミットメントを要請し、意見交換

を行うこととした。

調査エリア	A戦争死者慰霊の世代間継承の歴史的展開	Bサードパーティーの慰霊関与と、当事者との関係構築の技法
国内	森, 清水, 村上, 渡邊	西村, 中山, トーマツ, シェフォル, イ
境界域	西村	土居, 粟津, 北村
海外	カマチヨ, プラート, ハイツ	西村, 中山, トホルザーク, 飯高, ミヤツカヤ, 田村

(下線は研究代表者および分担者)

4. 研究成果

以下、研究代表者および分担者による研究を中心に、サブプロジェクト毎にその成果を記すが、本研究全体として明らかになったこととして次の2点を指摘しうる。新たな慰霊活動や慰霊巡拝の創出・開拓といった契機や、時間的推移における慰霊活動の維持等において、死者との直接的関係を持たない宗教的・世俗的エージェントの果たす役割の重要性が確認された。同時に世代間継承における意味変容のあり方がその後の展開に大きく作用することも実証的に明らかとなった。

A戦争死者慰霊の世代間継承の歴史的展開 A-1 近世の武士社会における戦争死者慰霊の展開と近代的戦争死者慰霊への影響

ここでは、中世から近世に至る過程で起る武士社会における戦争死者祭祀の変化に注目し、近代の戦争死者慰霊へとつながる諸系譜の複線的展開の解明を目指した。具体的には、分担者の森謙二が九州・柳川藩における戦死者祭祀の歴史的な展開について調査を行い、主君が戦死者である家臣を祀る事例について実証的に研究した。もともと御霊信仰や仏教の怨親平等の影響のもとで戦死者を慰霊・供養する慣行は中世から近世にかけて行われていたが、近世初期の朱子学の影響の下で、主君が戦死した家臣をまつる風習が一部の大名の中で展開する。その一つの例が、柳川藩における戦死者供養であり、幕末期に

なるとその家臣をも「神」としてまつようになることが明らかとなった。〔その具体的な内容については、研究代表者の西村と分担者の村上による共編著『慰霊の系譜（仮）』（2013年8月に森話社より刊行予定）の中で紹介・考察しているのでここでの公表は差し控える。〕

また分担者の清水克行も、戦国期長宗我部氏の史跡の巡見を通じて、土佐藩成立以後の長宗我部時代についての伝承や顕彰行為について考察している。

A-2 近世・近代の地域社会における死者祭祀の継承と戦争死者慰霊との関連性

ここでは、地域のために犠牲になった者等を地域社会として慰霊顕彰する伝統について、戦争死者慰霊との関連性をも視野に入れながら、調査・検討を行った。

具体的には、分担者の清水克行が、戦国後期から江戸初期に日本列島各地で見られた鉄火起請（てっかぎしょう）とよばれる裁判に関わる犠牲者のための鉄火塚と、戦国社会の習俗を伝えるとされる慰霊碑・顕彰碑である耳塚・鼻塚を、それらにまつわる伝承とともに取り上げた。〔森同様、詳細は『慰霊の系譜（仮）』に譲り、ここでの公表は差し控える。〕

A-3 戦争記念施設における記憶内容と表象形式の世代的変更変容過程の特徴

分担者の村上興匡は、慰霊団体・施設が平和教育の拠点に変容する過程と、伝統文化教育として戦争体験が活用される様子についてアクションリサーチを行った。

沖縄や鹿児島では、元々は慰霊のための施設だったものが、平和教育のための施設として読み替えられて、観光との共存も見られる。そこでは、教員経験者が、歴史教育、平和教育の立場から、ボランティアとして戦争遺跡やガイドや体験を伝える語り部としての性格を担っている。東京でも空爆や戦中の苦しい生活について体験を持つ高齢者が数多く存在するが、そうした貴重な「証人」も時間の経過によって減少している。また各地で、当時の体験者を中心に、空襲のあった記念日に慰霊祭が行なわれてきたが、慰霊行事としては参加者の減少を余儀なくされている。

近年、そうした生存者の体験を体験談や絵画集の形で集めて出版する動きや、慰霊行事を平和教育の形に変化することによって、参加者の数を維持・増加させていこうとする傾向が見られる。

他方で、現在伝統文化と教育を結びつける試みが行われている。地域と密着した形で体験学習を行うことは、地域の人的文化的資源を学校教育に活かすという側面（特色ある学校教育）だけでなく、逆に地域活動の活性化

に学校が寄与できるという側面（地域社会活性化）も有している。

戦争体験についての記憶の保持と継承は、一つの地域文化として捉えることができる。地域の高齢者から戦争体験の聞き取りを行うことは、戦争の記憶を共有し、後世に残すという教育的効果があるばかりではなく、若い世代と交流することによって、地域の高齢者の生きる意味や意欲を創出する効果があり、結果として地域の高齢者見守りにも活用可能である。

A-4 戦争体験の非儀礼的継承の試みと戦争死者の記憶の関係

研究代表者の西村明は、長崎に動員されて被爆した奄美の被爆者をめぐって、地元の中学校で行われた演劇と、生存者の証言取材活動という非儀礼的活動について調査した。

上坂冬子が『奄美の原爆乙女』のルポルタージュを出版した後の1991年、名瀬市（現奄美市）の金久中学校の生徒による平和劇「夢、ではない・・・」が奄美振興会館で上演された。演劇の上演によって、「奄美の原爆乙女」という歴史的事実が、地域にとっての重要な事件として改めて多くの人々に開示されるとともに、物語の登場人物に自分を重ねることで、自分が何者であるのか、自分が帰属する地域や同時代の社会に対して何をなすのか、ということに注意を向けさせる回路を開いている。また、同校では、2008年に生徒会役員を中心に取り組んだ核兵器廃絶の署名活動を通して、同年解散した鹿児島県原爆被爆者福祉協議会奄美支部の存在を知り、署名活動だけでは、協議会支部が解散したという地域の現状への対応としては不十分であるということで証言DVD『未来に伝え続けたいこと—奄美からのメッセージ』の制作を行っている。

このDVDは、後世に体験者たちの証言を残すという目的のもとに制作されたものであるが、それにもまして、被爆者たちと出会い、直接話を聞き、その体験談を通して、かつてあった戦争の事実を生徒たちが生々しいものとして受け取ったことを表現するものとなっている。そしてまた、その生徒たち自身の体験が、この80分の大作を完成させた原動力になったことがうかがえる。

B サードパーティーの慰霊関与と、当事者との関係構築の技法

B-1 宗教的エージェントによる遺骨収集団の組織化とサードパーティーの関与の現状

沖縄・摩文仁で金光教那覇教会によって開催される金光教の遺骨収集奉仕活動には、金光教の信者だけでなく、信者ではないことを標榜する人物すらも関与することを許容する緩やかなネットワークが見られる。分担者

の土居浩と栗津賢太は、この遺骨収集活動の参与観察を通じて、そうした遺骨収集団の組織化とサードパーティーの関与の現状について調査、検討を行った。

土居によれば、この遺骨収集奉仕活動は、福岡から復帰前の沖縄へ開拓布教に赴いた金光教那覇教会長・林雅信氏を中心とし、1977年2月から現在まで、年に一度・二日間の日程で取り組まれているものである。林氏の講演録には、群集する黒アゲハを「異様な光景」「気持ちが悪く」と相済みませんけれどもそういう感じ」と捉えた同氏が、地元関係者の示唆を引き受け、黒アゲハの出現を御霊ひいては未発見の遺骨からの訴えとして受け取ろうとする変化がうかがえる。また2012年2月の活動では、参加者約90名のうち20名以上が「信者たち」ではない「一般参加」者であった。中でも1986年から「一般参加」している一人は、恒例となった事前調査のみならず、活動当日の現場において、初参加者への現場でのレクチャを金光教教師にうながし、いわば「信仰のリアリティと確信を与える」契機を用意したのであった。

B-2 世俗的エージェントによる遺骨収集活動の組織化の現状

沖縄では、日本政府による遺骨収集事業以前から地域住民や遺族会を主体として収骨作業および納骨施設の建設がやむにやまれぬ行為として行われたが、1995年に大規模な県民遺骨収集の終了した現在でも遺骨収集の努力は存在し、遺族や遺児の高齢化により、担い手を変えつつ継続されている。様々なボランティア団体やNPO法人が関与している。

分担者の栗津は、沖縄戦遺骨収集ボランティア「ガマフヤー」の活動の現地調査によって、活動の実態と当事者の意識を明らかにした。世代交代によって戦争経験や直接肉親戦争にかかわりを持たないという意味でサードパーティーである遺骨収集の参加者たちにとっても、遺骨は手を合わせるべき存在と見なされ、何らかの慰霊行為が行われる。とくに沖縄では複数のエージェントの参画によって意味変容が顕著に促されている傾向にある。ただし、そこでは「物」を強調することで政治的党派性が回避され、同時に宗教的な党派性を持たないことによって、市民参加や行政の関与を促し、「人間の尊厳」という意味に集約が可能となっている。そうしたゆるやかなネットワーク型の組織形態が市民参加型の遺骨収集の成功要因として指摘できるものである。

B-3 宗教的エージェントによる遺骨収集・戦地慰霊団の組織化と当事者の関与の戦後史

旧戦地への遺骨収集や慰霊巡拝の機運は昭和25年頃から高まるが、政府や遺族・戦

友等に働きかけて遺骨収集団や戦地慰霊団を組織化する上で仏教各宗派をはじめ、宗教的エージェントの働きかけは大きい。研究代表者の西村は、これまであまり顧みられることがなかったそうした宗教的エージェントの動向について、宗教界の日刊紙である『中外日報』の昭和20年代後半から昭和50年代前半までのマイクロフィルムから関連記事データを集成し、具体的な動向を把握した。

初期の政府事業に対する日本宗教連盟としての協力・参加のほかには個別宗派単位の動きが散見されるが、中でも昭和40年代に政府の第二次計画を後押しした民間組織による戦地への渡航の重要な事件として、昭和40年に中外日報社が企画・主催し、日本宗教連盟と日本遺族会が後援した「サイパン・グアム・比島方面戦没者慰霊団」の動きは注目値する。実際の参加者は、神道と仏教の宗教者に遺族やジャーナリストを含め10名程度の規模であったが、「とりわけ政府の遺骨収集計画から漏れた同地方に、日本宗教界の中でもことに縁の深かった神道・仏教の関係者が自主的に参画することは誠に意義深い」と、記事の中でもその重要性が強調されている。また、同慰霊団がその後の各方面に及ぼした効果としては、慰霊団の帰国後から数か月後、グアムにグアムのカトリック神父が来日し、南太平洋地域で亡くなった40万の日本軍将兵、民間人のための慰霊公苑と慰霊塔の建立を行うよう呼びかけ、カトリックと全日本仏教会をはじめ国会議員やグアムの政財界関係者等が中心となって南太平洋戦没者慰霊協会が設立されている。

こうした現地と日本の間で展開された超宗派的協力はパプアニューギニアにおいても見られるが、宗教的エージェントの媒介機能が確認できるばかりではなく、戦後の日本宗教のあり方を考える上でも、興味深い事例となっている。

B-4 戦地慰霊団における宗教的・世俗的エージェントと当事者との関係性

旧戦地への慰霊渡航は現在も続けられ、現在も戦死者の戦友の参加も見られるものの、遺族に関しては第一世代（戦死者の妻や兄弟）ばかりではなく、第二・第三世代へと推移してきている。また、戦地慰霊団の組織化に関しては、神職・僧侶等の宗教的エージェントばかりではなく、NGOや観光業者等の世俗的エージェントの存在も無視できない。分担者の中山郁は、パプアニューギニアとパラオにおける慰霊活動の展開過程並びに現状と、それを支えるサードパーティーの役割について調査を行った。

昭和30年初め頃の日本政府による限定的な遺骨収集の後、昭和40年代に入ると、海外渡航自由化と高度経済成長による生活の

安定により、旧戦場の情報入手が容易になり、また、戦友会、遺族会の活動が活性化された状況に押されて国による大規模収骨が開始された。この事業を通じて戦友会や旅行業者が現地旅行のノウハウを学び、これが昭和50年代以降の官民による展開の基礎となった。

慰霊巡拝の展開にはサードパーティーともいえる現地人の協力者の存在が大きい。すなわち、戦中の日本軍との交流や、統治時代を懐古する現地人や日系人の組織が慰霊団受け入れや慰霊碑建立・維持に協力していた。しかし現在では現地側の世代交代と、慰霊団側の高齢化により、現地慰霊巡拝や慰霊碑を支えた基盤が弱体化し、慰霊碑の存在が現地で浮き上がったものになりつつある。

慰霊団の渡航は当該地での日本人観光を切り開いたが、パラオでは後に戦跡観光はダイビング観光のオプションツアーと化したのに対し、パプアニューギニアの場合、かなり後まで慰霊団が観光客の中心であった。ただし、後者の場合、日本人による戦跡観光のノウハウが現地の一般観光にそれほど生かされていないという批判もある。旧戦場という「聖地」とそこでの出来事は慰霊団の中だけで語られる内向きの物語であったこともあり、現地の旅行社にガイドのノウハウが移転されなかったことによる。初期のガム、サイパン島の観光において現地人ガイドがしばしば「先達」として戦没日本人の代弁者たるうとしたことと、好対照といえる。

慰霊団の構成は引率者と被引率者から成る。引率者は単に旧戦場を案内するだけではなく、そこで行われた戦闘と死の様を、戦死者になりかわり、その気持を代弁して表現する。彼らは旧戦場という「異界」へ人々を誘う「先達」であるとともに、現地で被引率者を死者の霊魂に逢わせ、かつ戦死者の声を代弁する、いわば巫者的な存在でもある。この「先達」的役割は、当初は生還戦友が行っていたが、戦友の高齢化とともに、被引率者であった遺族へ、さらにはツアーコンダクターや宗教者にも受け継がれていっている。

現地慰霊においては、戦友や遺族が死者の魂を一方的に慰めるのではなく、死者への慰霊を通じて自ら慰められ、または死者からの加護を受けるといふ、いわば「慰め、慰められる関係」という観念が観察される。

慰霊団を現地で迎える現地旅行業者の存在が慰霊団の活動を支えてきた。当初は現地在留の日本人が仕事の合間に旅行手配を行ってきたが、慰霊団以外の旅客がふえるとともに、日本人相手の現地旅行社が成立し、慰霊団も手掛けるようになった。また、遺骨収集でも現地の在留邦人は有益な支援を行っている。彼らエージェントは平均してビジネスの枠を超えて収骨団や慰霊団に協力し、しばしば「先達」的存在としての役割を果たし

ている。ほとんどが戦後世代の彼らは、事業や海外青年協力隊等で旧戦地に入ったことで初めて「戦争」とそこで死んだ日本人の存在を「発見」し、意識化したことから、慰霊事業に強いシンパシーを感じるようになり、収骨団や慰霊団の戦友や遺族等の「先達」との触れ合いにより、さらにそれが強化されてゆくという傾向が見られる。これを通じて、彼らはローカルエージェントでありながらも、しばしば「先達」としての側面も見せるようになってゆくのである。

慰霊巡拝を通じて戦友、遺族、非戦争体験者、添乗員、宗教者、ローカルエージェントらは、緩やかな繋がりネットワークを形成してゆく。これは死者を介した旅の仲間のコミュニティともいえよう。そのネットワークの中から新たな先達が生み出され、慰霊団を支えてゆく、という傾向が見られよう。

こうした各サブプロジェクトの研究成果のほかに、ゲストスピーカーとして報告した研究協力者から新たにいくつかの論点が見出された。とくに今後の展望との関連で重要だと思われるのは、たとえば「ボルネオ」は自身がマーシャル諸島の米軍管理区域における日本人遺族会の慰霊に調査者として同行する中で、遺族会の軍当局との折衝のサポートから次第に会の新たな中心メンバーとして見なされていったプロセスを報告したが、サードパーティーとしての調査者・研究者の関与の問題は、本研究の想定していない主題であった。また、ミャンマーの旧戦地出身の「ヤンヤ」はミャンマーへ慰霊巡拝する戦友会との交流の中で、彼らのサポートで自身が日本へ留学した経緯に触れ、また戦友会や関連の国際交流団体の活動との深い関わりを報告したが、そうした現地側のサードパーティーの関与の実態はさらに探究する必要があるだろう。さらに、この事例はサブテーマAの世代間継承の問題とも関わり、そうした関与と継承のダイナミックな展開について、考察を深める必要がある。

本研究では、最終年度後半の研究代表者の海外渡航や東日本大震災の影響等によって、各サブプロジェクトによって得られた知見をすり合わせ、総合する時間を十分に確保できなかったことが大きな反省点であるが、他方で、これまでは限定的であった海外の研究動向との接続の可能性が大きく開かれたことも一定の成果として付言しておきたい。したがって、本研究期間の活動は今後継続的に展開される新たな研究の交流と進化のための重要なステップであったと理解している。

5. 主な発表論文等 〔雑誌論文〕(計20件)

1.土居浩、黒アゲハの道案内-金光教の沖縄遺骨収集奉仕活動から、沖縄戦死者の現在-複数の文脈から考える-復帰40年沖縄国際シンポジウム報告書、2012、95-98

2.Akira Nishimura, Battlefield Pilgrimage and Performative Memory: Contained Souls of Soldiers in Sites, Ashes, and Buddha Statues, Memory Connection Journal, 査読有、Vol.1, No.1, 2011、303-311, <http://www.memoryconnection.org/article/battlefield-pilgrimage-and-performative-memory-contained-souls-of-soldiers-in-sites-ashes-and-buddha-statues/>

3.中山郁、東部ニューギニア地域における遺骨収集と慰霊巡拝の展開、軍事史学、査読有、47巻18号、2011、75-94

4.粟津賢太、媒介される行為としての記憶-沖縄における遺骨収集の現代的展開、宗教と社会、査読有、16号、2010、3-31

5.清水克行、室町時代の特質を考える-応永・寛正の大飢饉の実態と原因、備前市歴史民俗資料館紀要、査読無、12号、2010、1-7 [学会発表] (計25件)

1.西村明、奄美・南薩地域と戦争死者慰霊、日本宗教学会第70回学術大会、2011年9月3日、関西学院大学

2.西村明、戦死者慰霊研究における孝本貢の業績と残された課題、日本宗教学会第69回学術大会、2010年9月4日、東洋大学

3.粟津賢太、新宗教教団による遺骨収集ボランティアの展開-沖縄の事例、日本宗教学会第69回学術大会、2010年9月4日、東洋大学

[図書] (計20件)

1.中山郁 (國學院大學研究開発推進センター編)、錦正社、招魂と慰霊の系譜、2013、343

2.青木美智男・森謙二編、日本経済評論社、三くだり半の世界とその周縁、2012、372

3.竹内勝徳・藤内哲也・西村明編、南方新社、クロスボーダーの地域学、2011、253

4.西村明 (池澤優・アンヌ・ブッシィ編)、秋山書店、非業の死の記憶-大量の死者をめぐる表象のポリティックス、2010、385

5.清水克行、中央公論社、日本神判史、2010、253

6.粟津賢太 (関沢まゆみ編)、昭和堂、戦争記憶論-忘却、変容そして継承、2010、278

[その他]

ホームページ等

<http://kannyotokeisyuu.cocolog-nifty.com/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

西村 明 (NISHIMURA, AKIRA)

鹿児島大学・法文学部・准教授

研究者番号：00381145

(2)研究分担者

森 謙二 (MORI, KENJI)

茨城キリスト教大学・文学部・教授

研究者番号：90113282

村上 興匡 (MURAKAMI, KOUKYO)

大正大学・人間学部・准教授

研究者番号：40292742

土居 浩 (DOI, HIROSHI)

ものづくり大学・建設学科・准教授

研究者番号：20337687

清水 克行 (SHIMIZU, KATSUYUKI)

明治大学・商学部・准教授

研究者番号：40440135

粟津 賢太 (AWAZU, KENTA)

南山大学・宗教文化研究所・研究員

研究者番号：30558911

中山 郁 (NAKAYAMA, KAORU)

國學院大學・教育開発推進機構・准教授

研究者番号：90445461

ドーマン ベンジャミン (DORMAN, BENJAMIN)

南山大学・外国語学部・准教授

研究者番号：80513605

(3)研究協力者

町 泰樹 (MACHI, TAIKI)

鹿児島大学大学院・人文社会科学研究所・博士後期課程

ドボルザーク グレック (DVORAK, GREG)

一橋大学大学院・法学研究科・准教授

飯高 伸五 (IITAKA, SHINGO)

高知県立大学・文化学部・専任講師

ミヤツカラヤ (MYATKALAYAR)

長崎短期大学・英語科・准教授(当時)

シェフトル M.G. (SHEFTALL, MORDECAI GEORGE)

静岡大学・情報学部・准教授

北村 毅 (KITAMURA, TSUYOSHI)

早稲田大学・琉球・沖縄研究所・客員准教授

カマチョ キース (CAMACHO, KEITH)

UCLA・アジアアメリカ研究学科・准教授

渡邊 一弘 (WATANABE KAZUHIRO)

昭和館・学芸部・学芸課長

ハインツ ボール (HEINTZ, PAUL)

アメリカ合衆国太平洋歴史公園・教育ディレクター

ブラート スティーブソン (BULLARD STEVEN)

オーストラリア国立戦争記念館・上級歴史研究員

イ ヨンジン (LEE, YOUNG JIN)

ソウル大学・比較文化研究所・研究員 (当時)

木村 勝彦 (KIMURA, KATSUHIKO)

長崎国際大学・人間社会学部・教授

田村 恵子 (TAMURA, KEIKO)

オーストラリア国立大学・太平洋アジア研究所・客員研究員

矢口 祐人 (YAGUCHI, YUJIN)

東京大学大学院・総合文化研究科・准教授